

氏名・（本籍）	富永 曜照（東京都）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	博甲第20号
学位授与年月日	令和3年3月10日
学位授与の要件	学位規程第2条第2項該当
学位論文題目	<i>Saddharmapuṇḍarīkasūtra</i> 第2章 <i>Upāyakauśalya</i> における <i>ābhimānika</i> （増上慢）の研究
論文審査委員	主 査 教授 齊藤 明 副 査 教授 デレアヌ フロリン 副 査 教授 幅田 裕美

## 論文内容の要旨

*Saddharmapuṇḍarīkasūtra*（以下、SP と略す）はネパール・Gilgit 系写本と中央アジア出土写本という異なる伝播経路を持つことが知られている。興味深いことに、Bechert [1976] は、中央アジア出土写本である Kashgar 写本は、“just another recension of the *Saddharmapuṇḍarīka*” ではない、と述べる。

ところで、SP 各章の成立に関しては今なお議論の余地があるが、第2章 *Upāyakauśalya* を古層である と考えることは、布施 [1934]、ならびに横超 [1969]、平川 [1989]の先行研究から考えて妥当であり、なおかつ、第2章は SP の主要な教義である一乗説を扱う点から考えても重要な章といえる。そしてこの一乗説に関係する出来事として、「五千起去」と呼ばれる内容が見られる。これは、釈尊の会座にいる者の内、五千人の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷がその場から退座するが、その理由とは、獲得していないのに獲得したという思いを懐き、達していないのに達したという思いを懐くという増上慢であるため、釈尊がこれから説こうとされる教説（一乗説）を聞かずに退席した、と SP は説明する。この、獲得していないのに獲得したという思いを懐き、達していないのに達したという思いを懐くという増上慢の解釈は『俱舍論』や *Vibhaṅga* などのアビダルマ（論）において通説となっており、増上慢の一般的特性と見做されている。

興味深いことに、五千起去が記される長行とそれに対応する第39偈を対比して検討すると、先に挙げた増上慢の特性に関する解釈の相違を反映してか、これまでに公にされた校訂テキスト間に異読が見られる。すなわち、五千起去が記される長行箇所と対応する第39偈におけるサンスクリット本の校訂に関する問題である。KN (*Saddharmapuṇḍarīka*. Ed. by H. Kern and B. Nanjio) は、ネパール系・Gilgit 写本の読みである *saṃpaśyanta imaṃ doṣaṃ*（この過失を見ながら）を採用する。

一方で WT (荻原雲来・土田勝弥校訂本『梵文法華經』 *Saddharmapuṇḍarīka-sūtram*) は、同箇所を *apaśyanta imaṃ doṣaṃ* (この 過失を見ていない) と校訂し、その理由とは、漢訳『妙法蓮華經』(以下、『妙法華』と略す)に「不自 見其過」の読みがあり、加えて、増上慢ならば「過失」を見ないだろう、と述べる。さらにまた、この 第 39 偈の読みを基に、長行に出る「五千起去」に関しても *ajñātvā* と校訂する必要性を述べる。

そこで、第 1 章において現存するサンスクリット諸写本、チベット大蔵經・カンギユル、『妙法華』の諸版本ならびに日本古写經に伝承される諸写本、ならびに敦煌出土『法華經』写本の該当箇所を確認した。その結果、2 つの可能性が考えられた。第一に、第 39 偈 *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* の読みに関しては、① ネパール系写本、および Gilgit B がこの読みを支持し、② 長行 *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* の読みとも一致し、③ 第 39 偈内の *vraṇāṃś ca parirakṣantaḥ* (諸々の傷(欠陥)を隠し)の内容、すなわち、諸々の傷(欠陥)を隠すということは、増上慢が自らに傷(欠陥)があることを知っているとの解釈を裏づける、というこれら三点の内容を総合して考えると、第 39 偈を *sampaśyanta imaṃ doṣaṃ* と読むことは可能である。

次に、Kashgar 写本のみにもみられる *svāni doṣāṇy apaśyantās* (自らの諸々の過失を見ていない)の読みは、『妙法華』の「不自見其過」、『正法華』の「不自見瑕穢」に対応する。漢訳の成立年代の古さを考慮し、また同写本が現在に伝わるサンスクリット資料の範囲内ではかなり古い部類に属することを考え合わせると、Kashgar 写本の読みは支持されるであろう。加えて、増上慢の語義解釈を反映させて読んだ際は、Kashgar 写本の読みが理解され易いであろう。

そこで第 2 章では、Kashgar 写本の読みに一致する漢訳「不自見」で読んだ際の増上慢の特性を検討するため、『妙法華』の注釈書である世親著『妙法蓮華經優波題舍』、ならびに中国註釈家が著した『法華經』注釈書を用いて検討した。その結果、増上慢は、「伝統的に声聞が求めてきた阿羅漢[果]を得ていないのに得たと謂い、証していないのに証したと謂っている」ことが明らかとなった。このような想いを懐く増上慢は、小乗を修習し、未だ小乗の果を得ていないのに小乗の果を得たと思い、この小乗の果を究極のものとして大乘の法を受けない「失(*vraṇam*)」を有する。更にまた、「小乗の教法に執し、文字にとらわれ、増上慢を懐く」という「過(*doṣaḥ*)」を見ず(=知らず)、「心の内で小乗に執着して小乗を捨てない」瑕疵(*vraṇam*)を護り、釈尊の会座から退出する者たちである。すなわち、Kashgar 写本の読みを基に増上慢の特性を解釈すれば、増上慢の語義解釈が多分に影響していることが分かる。

SP に説かれる一乗説が説一切有部系の部派教団における三乗観を批判しており、SP で会座から退出する増上慢も小乗に固執し、釈尊が一乗説の詳細を説く直前に退座するという類似点に照らし、第 3 章では、説一切有部系の部派教団における三乗に関する伝統的理解を確認した。説一切有部系の部派教団の三乗理解に基づくと、声聞は、三乗の智/覚慧のレベルに上・中・下の相違があり、加えて、仏の特性 (*buddhadharma*) (=十八不共仏法)、ならびに利他行に関しても、仏とは決定的な差異を持つという事実を明確に理解していることが判明した。それ故に声聞は伝統的に声聞乗を修習するのであろう。これはすなわち、釈尊の会座から退出する増上慢が、仏と自分たちとの決定的な相違を知る者である、とも言えようか。そして、このような解釈に立てば、

KN の読みである *sampraśyanta imaṃ doṣaṃ* も理解できるだろう。

SP のネパール・Gilgit 系写本と、中央アジア出土写本である Kashgar 写本という 2 系統の写本が、第 39 偈の増上慢の特性に関して異なる読みを示す理由は定かではない。しかしながら本論文は、ネパール・Gilgit 系写本の読みを持つ KN の *sampraśyanta imaṃ doṣaṃ* と、漢訳の読み「不自見」に対応する Kashgar 写本の *svāni doṣāṇy apasāyantās* の読みに関して、それぞれ異なる解釈を背景に SP の読みを伝えた可能性 があることを示唆するものである。

## 論文審査の結果の要旨

*Saddharmapuṇḍarīka* (白蓮華のような正しい法) の名で知られる『妙法蓮華経』(406 年、鳩摩羅什訳、以下、『法華経』と略称) の第 2 章「手段 (方便) に巧みであること」(以下、「方便品」) の中に、五千起去 (あるいは五千上慢) と呼ばれるエピソードがある。仏が、弟子のシャーリプトラ (舎利弗) による三度の懇請に応じて「一乗」説を説こうとしたとき、それを聞かずに五千人の増上慢の出家者 (比丘・比丘尼) と在家者 (優婆塞・優婆夷) が立ち去ったという、重要な意味をもつ挿話である。しかしながら、このエピソードの正確な理解については、多くの研究者によって様々な翻訳と解釈が提示されてきたものの、従来の校訂テキストに問題があることもあって、未解決なままに残されてきた。

本論文は、この五千起去をめぐって、テキストとその解釈問題、立ち去った五千人の四衆 (比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷) が増上慢 (*ābhimānika*) と呼ばれたことの意味にあらためて焦点を当て、本格的な考察を加えている。研究史と当該章の文脈の分析 (序論)、散文と対応韻文箇所テキストと翻訳 (第 1 章)、ヴァスバンドゥ (世親) 作『法華論』、および鳩摩羅什訳に基づいて注釈を施した道生、法雲、智顛、吉蔵、基による主要な注釈文献に見る諸解釈の比較考察 (第 2 章)、仏・独覺・声聞による三種菩提、阿羅漢と仏の差異に関する伝統的理解の検討 (第 3 章)、という当該のテーマを考える上で不可欠の複数の観点から興味深い分析と考察を行っている。

とくに第 1 章では、現時点で入手可能な写本 (ネパール系諸写本、ギルギット本、中央アジア出土写本、その他)、およびチベット語訳と漢訳を精査し、散文箇所 (長行) のケルン・南條本の *ta ātmānaṃ savraṇaṃ jñātvā* (彼らは自らに傷 (欠陥) があることを知ったうえで) とともに、対応する第 39 偈の冒頭箇所 *sampraśyanta imaṃ doṣaṃ* (この過失を見ながら) に焦点を当ててテキスト上の異同を比較検討し、従来の翻訳と解釈に批判的な考察を加える。対応するチベット語訳と漢訳の比較考察に際しては、諸版本および古写経をも含む入手可能な資料を精査して分析を行っている。散文箇所に内容的な大きな相違はないものの、対応する韻文部分 (第 39 偈冒頭) については、羅什訳「不自見其過」の内容に Kashgar 写本 *svāni doṣāṇy apasāyantās* (自らの諸々の過失を見ていない) の異読が対応することをめぐって、興味深く、説得力のある考察を加えている。

第 2 章の考察は、中国における『法華経』解釈史の視点からも興味深いのが、増上慢の定義的な解釈ともいえる「未だ得ざるを得たりと謂い、未だ證せざるを證せりと謂えり。」(羅什訳) の解

釈をめぐり注釈家の解釈には、教理的な意味づけに差異は見られるものの、小乗の果を得ていないのに得たと思ひ、それを究極として大乘の方を受けない者、とする共通理解があることを指摘する。

第3章は、三乗と一乗をめぐりインド仏教思想史上の重要なテーマを扱うもので、本論文では起承転結の「転」に当たる。三種菩提、とくに声聞と仏の菩提には差異があるのかないのか、あるいはまた菩提そのものの差異ではなく、仏には自利と利他の両面において声聞や独覺とは共通しない特性（十八不共法、等）があるのかは、インド仏教史上の重要なテーマの1つであった。本論文は、説一切有部系の部派教団もまた三乗の別、ならびに三種菩提の差異を自覚した上で、声聞乗を修習するという積年の伝統が、『法華経』の当該章における「増上慢」の背景にあることを指摘する。

令和3年3月2日午後2時から午後3時40分までの約100分にわたり、提出論文についての口述試験を厳正に実施した。主査・副査から、提出論文の優れた貢献が評価されるとともに、部分的に修正を要する箇所の指摘もなされた。本論文は、『法華経』「方便品」において一乗説に背を向けて退座した五千の「増上慢」をめぐり、重要な関連表現に焦点を絞り、入手可能な関連写本と緻密なテキスト分析と解釈をもとに、期待される複数の観点から興味深い考察を行い、文献学的に説得力のある結論を導いている点が高く評価された。一方また、関連語句の意味をさらに掘り下げて検討することと併せ、一部に、より厳密な論述が求められる箇所も見られる点の指摘もなされた。

口述試験終了後、主査・副査の合議の結果、本論文は『法華経』の一乗思想とその背景の理解に関わる、退去した五千人の「増上慢」をめぐり、期待される複数の観点から厳密な文献学的研究を行った画期的な成果であり、『法華経』研究の分野に大きく貢献すると認められた。本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに相応しい成果であると判断する。